CORE Metadata, citation and similar papers at core.ac.uk

最近のパリ・ニユーヨークモードの傾向について

阿　部　邦　子
（被服構成学研究室）

The Latest Mode Tendency in Paris and New Yark

Kuniko ABE

Ⅰ序論

最近の服装は、流行にとらわれず自由に着たい物を着、各自の個性を出し、その人らしい美しさを出すという傾向になって来た。その場合T.P.Oを考慮する事は勿論であるが、スカートの長さにしても、ミニ、ミディ、ロングとその流行を気にしたり、何々ラインという言葉につられて、それ以外の物は流行遅れだという様な傾向はなくなった。しかし注意を払って見ると国により、デザイナーにより、またその時の社会情勢により種々に傾向が変化して来ている。そこで、いま世界の2つの主流であるパリとニューヨークのモードについて、幾つかの流れをひろってみたいと思う。

Ⅱ本論

◎パリ

オートクチュールは1月、7月に世界のバイヤー、評論家、報道関係者が集まった中で発表会を行う。モードはその時代の世相、風俗、美術、文学、映画、音楽等の影響が非常に大きい。ここ数年オートクチュールはその手のこんだ仕立て等の関係で、当然の事とはいいながら非常に高価になって来たため、購買力がおちて、プレタポルテに押され気味であった。プレタポルテの方は若手のデザイナー、特に日本の高田賢三、三宅一生等の、直線裁のだぶだぶの服を、自分の好きな所でしばって着る、いわゆるビッグな傾向に引きづられて行ったかに見えたが、再びオートクチュール独特のカットの良さ、縫製の丁寧さを生かした物が復活して来ている。5月と10月に前シーズンのオートクチュールの中からプレタポルテ向きにアレンジした服のコレクションもあり、現在両方手がけているクチュリエが多い。パリコレクションはニューヨーク、ロンドン、ローマ、東京の流行の指導的立場にある。

○ショーの傾向

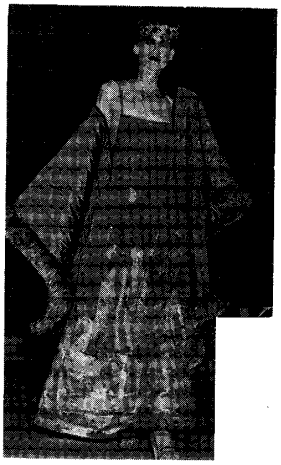
不況、沈滞ムードから脱したいという切実な願いがこめられ、モードはパリの花形産業であると言われるのも最もとうなづける程、華やかでスペクタクル化して来た。また上流社会だけでなく、一般大衆にアピールさせる方向に向いて来た。

例えばCardinは世界中から集まったモードジャーナリスト、カメラマン等をバス4台でオルリー空港に運び、ここから特別チャター機でリョンのサトラス空港に飛び、このロビーに造った舞台で200点のコレクションを見せ、その一部に展示したリョンの絹織物を手にとって見せ、またバスでリョンの織物美術館見学、ホール一杯に用意されたテーブルで世界的なリョン料理をふるまった。これはパリモードのデサントラリザション（非中央化）と、またイタリアの絹織物からリョンのそれを守ろうという意志の現われでもあった。

またSchiaparelliは自分のメゾンの3階の窓からヴァンドーム広場に向けて大野外舞台を作り、ここでショーをして集まった群衆に見せた。

第1図　キルテングジャケット[2)]

第2図　キルテングストール[3)]



St. Laurentはホテル・インターコンティネンタルの大サロンで500人を招いて、ワグナーのトリスタンとイゾルデの歌をバックに劇的なコレクションを繰り広げた。これらは昨年位からの傾向で、「[1)]王朝風な白と金の部屋、金塗のきゃしゃな椅子、大きな花束、メゾン・ド・レと云われる部屋で絹のカーテンをめぐらして、静かに格調高く秘密めいた雰囲気で見せていたオートクチュールのコレクションは何処へ行ってしまったのだろう？」と嘆く人が居る程、デザイナー達は各メゾンを抜け出し、カメラマンの雑踏する落ち着かない雰囲気の中でショーを行なう傾向になって来た。しかし結果的に云えば、ショーに力を入れたメゾン程作品のアイデアも豊富で、アトリエの仕事も意気が上っていると云えた。見る側から云えば、伝統的過ぎて、新しさがなく退屈になっていったオートクチュールコレクション時代に比べ、目ざましく変化して楽しくなった。

○コレクションの主な傾向

昼の服は、素材はツィード、フラノ、カシミア等を用いて、シンプルでエレガントな傾向の物が多く、ソワレの色は黒、金、素材はベルベット、タフタ、ファイユ、クレープデシン、クロッケ等を用い、豪華でクラシックなムードのものが多い様である。次に細かい点を具体的に順を追ってあげてみよう。

(1)キルティング

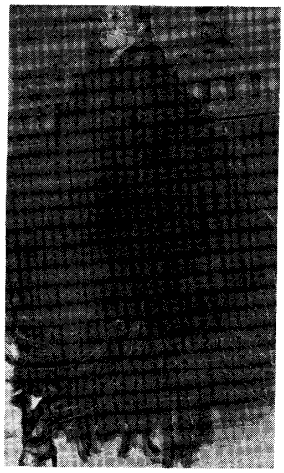
キルティングは保温性で人気があり、今まではナイトガウンやスキーウエアーとして用いられていた。一昨年頃からSt. LaurentやLanvinがジャケットやコートにぽつぽつ用いて来たが、これに優雅さが加わり華やかな作品となってソワレにまで多く登場した。第1図は大柄プリントのベルベットのドレスに、サテンをキルティングし、ミンクのトリミングをしたジャケットを組合せたSt. Laurentのアンサンブルである。第2図はLanvinのソワレで、赤いドレスに、ブルーシルクにキルティングして、黒てんで縁どりしたストールを組合せている。

その他コート、スカート、ジャケットにキルティングした物が非常に多い。

(2)ファー

従来のファーはミンク等を接合わせて、コートやジャケットにするとか、ウールのコートの衿だけにファーをかぶせるという使い方が普通だったが、今シーズンは、これらと一味違う手法が目につく。即ちトリシングするにしても、前端や裾だけでなく袖付部位にも用いるとか、細かく切ってフリンジにして用いたりしている。第3図はファーを細かく紐状にして、メッシュに編み、裾にフ

第3図　フアーメッシュケープ[4)]



第4図　パッチワークジャケット[5)]

第5図　パッチワークジャケット[6)]

第6図　フード付ケープ[7)]

第7図　インバネス風ケープ[8]

第8図　巡礼風ケープ

第9図　フリンジ付ケープ[9]

第10図　ケープレットドレス

ァーの長いフリンジを付けて作ったPaco Rabanneのケープである。第4図はGivenchyの作品で、スエードの地にミンクをベーズリー型に切り抜いてパッチワークをしたジャケットである。第5図は同じく彼のスワカラのジャケットに唐草模様をアップリケした非常に手のこんだ物であるが、これらは今までなかった新しい使い方として注目に値する。

(3)マント、ケープ

一昨年に第6図の様にUngaroが、ソワレにフード付のラメのケープを見せているが、今シーズンになると昼の服からソワレまでマントやケープが、非常に多くなって来たのが目立つ。カシミア、ツイード、ベルベットを用いたフード付の防寒用のマントは、Givenchy 等の普通丈の物から、Scherrerのロングまで、また第7図は50年前頃に流行した男物のインバネスを思い出させる様なLaroche のケープである。Cardinは巡礼ラインと称する一連のケープレットを発表しているが、第8図は中世の昔、エルサレムに巡礼に行く人々の服装がヒントになったと云われるセーター、パンツ、ケープの組合せである。第9図は森英恵のフリンジ付ケープで日本の東北地方の「かくまき」を髣髴とさせるものがある。また外衣としてのケープだけでなく、第10図、第11図の様にドレスの上半身をケープ風にデザインした物も非常に多く現われている。

(4)パンツ類

普通のパンタロンが少なくなって、足首でしぼった物、また非常に細い物、反対に巾をたっぷり広くして足首でしぼったハーレムパンツ、ヅワープパンツ等が目につく。森英恵は第12図の様なクロッケのチュニックと組合せて、足首でしぼったパンタロンを見せている。第13図はPaco Rabanne のハーレムパンツである。また第14図は金ラメのチュールレースのブラウス、赤いラメクロースをたっぷり用いたハーレムパンツ、オーストリッチの羽根を飾ったベストと組合せた森英恵のソワレである。またキュロットスカートが多く見られ昼の服は、その機能性の為、多く用いられるのは勿論であるが、ソワレにも優雅なキュロットが目立つ。第15図はEsterel の、刺繍をほどこしたタフタのブラウスに、上質モアレをたっぷり使ったロングキュロットを組合せたピンクのソワレで、柔らかいシフォンのストールが優しい女らしさをプラスしている。第16図は厚地シルクサテンのゆったりとしながら非常にシンプルなGivenchy のキュロットのイブニングで、美しい線が魅力的である。

第11図　ケープレットドレス

第12図　足首でしぼったパンタロン

(5)ピエロカラー

衿で新しい物は第17図の様なピエロカラーで、コレットの小説に出て来るジジという女性の神秘的でちゃめっ気のある淑女のイメージから来ている放射状にタックをとった衿である。Dior、Nina Ricciをはじめ数多く見られる。

(6)オリエンタル調

ヨーロッパの人々から見て自分達の文化の外にある物がイマジネーションをかきたてるのであろうか。中近東をはじめシルクロード周辺から中国、日本等東洋調が非常に目につく。第18図は元の第一皇帝フビライをイメージにおいたSt. Laurentの細いパンツとダマスクの豪華なコートの組合せ、その他St. Laurent はクーリーハットや中国風の打合せを良く使っている。また第19図の様な日本の着物にへこ帯を締めた感じのドレスも数点あり左前、右前両方あるのは面白い。第20図は Schiaparelli の、衿は中国風、袖は日本風のクレープサテンのドレスである。

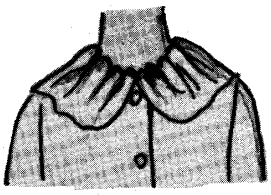
第13図　ハーレムパンツ

第14図　ハーレムパンツ

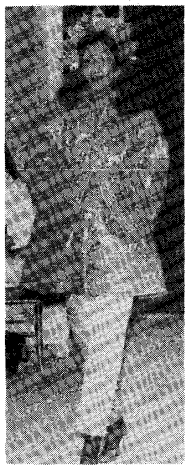
第15図　キュロットソワレ[10]

第16図　キュロットソワレ[11]

第17図　ピエロカラー



第18図　フビライ風コート[12]



(7)ソワレはクラシックムードで豪華に

いわゆるチュニックに代表される今までの着易さ、シンプルな機能性は昼の服に移行し、ソワレはこれに逆行し豪華にクラシック調になって来た。その一つの風潮として、一昨年から18世紀風にタフタやモアレをたっぷりと使用したフルスカートが多くなり、大舞踏会を見ている様な感があったが、今シーズンもこのクラシック調は続いている。

第21図は St. Laurent のバッスルスタイルのモードである。　1870年～1890年頃の服装で、スカートの余分を後腰部でまとめ、腰あてによってその型をととのえた形で、明治初年、鹿鳴館時代に日本に入って来たのはこのスタイルである。第22図は Crahay の衿元をきっちりつめ、袖口を細くし袖山にギャザーでボリウムをもたせたいわゆる1890年頃の「羊の脚」その物といったソワレである。

クラシックのもう一つの風潮として現われたのはSchiaparelli に代表されるビザンチン調である。紀元400年頃のビザンチンのダルマチカの形からヒントを得たもので、カットは直線裁で非常にシンプルである。第23図はそれらの中の一つ、Schiaparelli の縞のダマスクを用いたロングドレスである。

また夜の服に繊細な女らしさを加えるためのいろいろの手法が目立つ。その一つはフリンジで、体の動につれて微妙にゆれて女らしい陰影をかもし出す。このフリンジを裾、袖口は勿論、胸や腰の切り換えにも用いたものが多い。第24図はSt・Laurent の、フリンジを衿ぐりと腰に飾っ

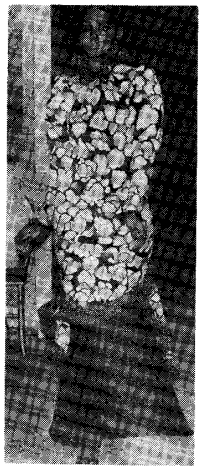
第19図　着物風ドレス

第20図　東洋風ドレス[13]

た黒のドレスである。

また鳥の羽根も女らしさをプラスするものとして、近頃大部目立って来た。日本の羽根つきの羽根その物の様なLarocheのイヤリング、St. Laurentのチョーカー、ドレスの胸にちりばめたEsterel等様々である。第25図の柔らかいオーストリッチをアシンメトリーに配置した白ジョーゼットのChanelのアンサンブルは非常に美しい。またLaroche. Diorは帽子の飾りに、Balmainは白と黒のオーストリッチを黒タフタのポンチョの縁どりに、Courreges、Lanvinはジャケットや、ドレスの上半身を羽根でうずめるなど、数多く目に触れる。とにかく、ソワレはパリのオートクチュールの生命とう云うべく、優雅で、美しく、豪華である。

第21図　バッスルスタイル[14]



◎ニューヨーク

1976年はアメリカの建国200年祭であった。過去のアメリカはデモクラシーを唱えながら全人種が平等でない矛盾、物質文明が発達し、経済大国でありながら古い伝統のある国々に遅れをとり、ヨーロッパの国々から金の力に物をいわせる成り上りと見られるコンプレックスがあった。1960年代の革命の後、1970年前半は人々の表情から怒りと同時に生気も消え沈滞していたが、建国200年を機に自信を持とうという前向きの姿勢となった。映画監督や、バレエダンサーが自国からアメリカへ亡命して来たり、美術、音楽もニューヨークを中心とする様になった。モードに関して過去はどうしてもパリに一目おき、パリの動きに左右された。1977年早々にカーター夫妻がホワイトハウス入りし、失業状態も良くならず、経済も活発化せず、燃料危機白書が出され、ファッションどころではないという気分もあったが、世界の中心になりつつあると云う誇りがファッション界にも好影響し、コンプレックスのない若いデザイナーが次々と出、ベテランもこれにつれて良い仕事をした。

第22図　「羊の脚」の袖

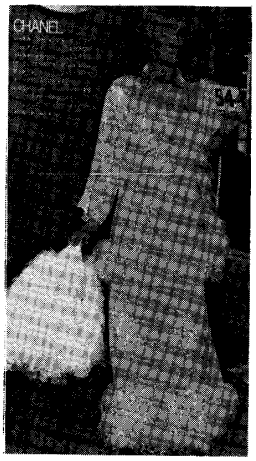
ニューヨークの女性の多くは仕事を持ち、社会奉仕に、子供の教育に、政治運動に忙しい。その中で美しい女性である事を願い、流行の先端を行く事を恥とし、ニューヨーク風にブレンドされ、女性その物が映える服を好んだ。黒いどっしりした建物、大理石の柱の目立つニューヨークの街では、派手な色は死んで野暮ったく見え、アースカラーと云われる一連の茶系統の色調が好まれる。若い人もあまり抵抗感のあるものよりも静かで健康的な物を求める。東京のヒッピー風とか民族服そのままの様な女性の服装から見るとエレガントで大人のシックさがある。

アメリカの女性は夜の服より昼の服に重点をおく。またアメリカファッションの根本原理はショ

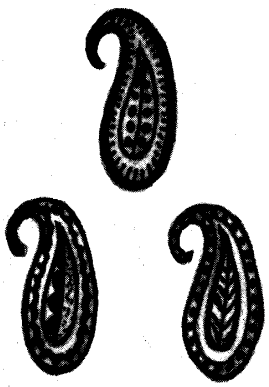
第23図　ビザンチン調ドレス[15]

第24図　フリンジ付ドレス

第25図 オーストリッチを飾ったソワレ[16]



第26図 ベーズリー



ー的効果より機能性、合理性に重きをおく。次に具体的な傾向をひろってみる。

(1)ベーズリープリント

第26図の様なベーズリープリントは、Geoffrey Beeneの絹のロングドレス、Bill Blassは前ボタンのスカートに、Patti Cappallyは大きいベーズリープリントの広いスカートにテーラードジャケットを組ませている。ボーダー柄のベーズリープリントが他に数人のデザイナーが使っている。

第27図 紐まきパンツ

(2)日常着としてのパンツ

ニューヨーク女性はパンツを好む。燃料危機に対応するためか、いわゆるパンタロンもパリと異なって、まだまだ多いが、Gil Aunbej のフェクスエードのレギンス、第27図の様なCharles Supponのタイツ風に見え足首から膝の間を紐でまいたパンツ、Perry Ellisのキルティングパンツ、Holston のボディスーツ、第28図の様なCarol Horn のチェックのスモック風シャツとタイツの組合せ、その他ニッカーズ、ジョッパーズ、シガレットパンツ等いろいろの形が見られる。ニューヨーク女性は一度着心地が良いと決めた物は脱ごうとしないので、パンツは永久的な物として続いて行くだろう。

(3)同色の異材料

同色に染めた異材料を組合せる事が目につく。Bill Blass のアースカラーに染めたカシミアのロングドレスにあらい熊の袖なしコート、John Anthony は明色のグレーのサテンドレスにファーのコート、アースカラーのサテンのパンツとブラウスに同色の狐のコートの組合せなど、色彩に深みがあり大人の女の雰囲気を感じさせる。

(4)キルティング

パリと同じにやはりキルティングが目につく。Bill Haire のモヘアにキルティングしたコート、森英恵は夜のジャケットに日本独特の麻の葉模様のキルティングを使い、Perry Ellisのキルティングのパンツ、Geoffrey Beeneはベルベットの花模様の布地にキルティングをしてジャケットに、Gill Aunbejはキルティングのボレロをいろいろに組ませている。

(5)日本の美に注目する

第29図は Mary Mcfadden が、京都の染色家前田親男の正倉院御物の唐草模様の素材を使ってデザインしたソワレ。第30図はキング商事の流水の模様のソワレである。日本の能衣裳や小袖の展覧会も開かれ、日本の美が多くの人の目に触れている。

(6)レイアードルック

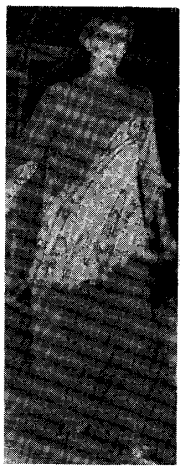
スェーター、スカート、ジャケット、ストールと素材の違うものを次々と上に着て行くレイアードルック。平凡だがカジュアルで嫌味のないものが大部分である。Perry Ellisが、自らスラウチ（不精な、だらしない）ルックと云っている様に、袖付のおちたもの、だぶたぶのもの等を、衿のボタンもかけずに、順序かまわず上に上にとは

第28図 シャツとタイツの組合せ[17]

第29図 唐草模様[18]

おって行ったかに見えるものもある。若者的なナウな感覚というのかも知れない。

第30図　流　水[19]



素材は昼の服はニット、モヘア、ウールフランネル、ツィード、ヘリンボン、コージュロイ、色はアースカラーを主にしたグレー、ベージュが主である。夜の服はラメ、タフタ、デシン、シフォン、色は黒、金、赤、白、其の他、グレー、ラベンダー系の色も使っている。ニューヨークファッションは昼の服を主としているが、夜の服もあまりデコラティブでなくすっきりとまとめている。

Ⅲまとめ

ヨーロッパの主導的立場にあるパリモードと、独立後２００年以上経過して、大人になったニューヨークファッションからそれぞれの傾向を拾って見た。前者は、不況の中とはいいながら、発表会そのものも大規模になったが、同時に一般大衆化してきている。モードの傾向は、昼の服はシンプルでエレガントに、夜の服はクラシック調で豪華になってきた。着て見たいとつくづく思う様なモードも多く、夢があると同時に、しっとりと洗練された女らしさに満ちている。

近年光り出したニューヨークファッションの特徴は、機能的で地に足がついている事である。今まで着なれた形の中から、定着した幾つかの物を組合せて着るなに気なさが身上である。色彩はアースカラーを中心にした、おさえた深みのある色調を保ちながら美しい雰囲気を出している。

世界が非常に狭くなり、情報の伝達の早い現在、各国のモードの差は無くなっているが、それぞれの国民性の違いが、次々に現れるモードの底にも流れ、にじみ出ている事がうかがわれる。

引　用　文　献

1）　ハイファッション、１０、Ｐ４７（1976）
2）　Mode et Mode, No 170, P64 (1976)
3）　Mode et Mode, No 177, P123 (1977)
4）　Mode et Mode, No 177, P7 (1977)
5）　Mode et Mode, No177, P7 (1977)
6）　Mode et Mode, No177, P169 (1977)
7）　Mode et Mode, No170, P92 (1976)
8）　Mode et Mode, No177, P101 (1977)
9）　Mode et Mode, No177, P8 (1977)
10）　Mode et Mode, No177, P135 (1977)
11）　Mode et Mode, No177, P172 (1977)
12）　Mode et Mode, No177, P31 (1977)
13）　Mode et Mode, No177, P36 (1977)
14）　Mode et Mode, No177, P10 (1977)
15）　装苑，１０，Ｐ１０７(1977)
16）　Mode et Mode, No177, P38 (1976)
17）　ハイファッション，８，P26 (1977)
18）　Mode et Mode, No176, P154 (1977)
19）　Mode et Mode, No176, P154 (1977)

参　考　文　献

1）　中田満雄：服装の移り変り、東海書房（1972）
2）　石川綾子：日本女子洋装の源流と現代への展開、家政教育社（1968）
3）　田中千代：服飾事典、同文書院（1970）
4）　ハイファッション、10、（1977）

（昭和53年１月17日受理）